

炎のエスキース・残照編（二〇一五）より

小林守城

難民

蝉が網戸に止まって何かを待っている  
わたしの目の前で腹や手足の付け根を曝し  
荒い吐息さえ聞こえるようだ  
羽根は随分痛んでいる  
みどりの夜の難民 蝉の晩夏光

私には難民を受け入れる用意はある  
だがより近付けば本音を見据えたのか  
憎らしげにぎゃと鳴いて  
飛び去ってしまうだろう  
どこかでまた  
いのちの選別が始まった  
人が生きものを片づけられるのか  
人が人を見限ることができるのか  
暴力の連鎖はことばの光りで断つしかない  
（ああ！人という淋しき存在）

政治はいま 乗り出していく  
「積極的平和主義」という  
かーるいけれど  
本当は怖い言葉に載せて  
レトリックの帆を上げて  
行き先は見えていないが  
本音はすけて見えている

止めよう！ わたしは下りる！  
そんな淋しい船も国もいららない！  
マツチポンプのような  
セキュリティ保険はたくさんだ  
シリア難民と共に  
詩の言葉が見つかるように  
（ああ！日本という淋しき存在）

生死しょうじの中の雪ふりしきる（山頭火）

小林守城

かつて 放浪の俳人山頭火のこの句を  
一行の詩があればおれは生きられる  
ことばの宝石として  
座右銘の一行詩として  
わたしは心深く護持してきた  
わたしの詩の直覚はいい線いつていた  
だが不覚であった  
その句の序には  
「生を明らめ死を明きらむるは  
仏家一大事の因縁なり」とあったが  
その次はなかったのだ

大切な人の通夜のことである  
導師が突然 修証義の序を唱え始めて  
その次がでてきたのだ  
「生死の中に仏あれば生死なし、・・・」  
ああ その時わたしは打たれた  
そして開かれたわたしの式場に  
稲光と共にしずかな雷鳴を見た

雪は仏であったのだ

なるほど なるほど  
そうだろうな そうなのだ  
山頭火があえて省いたのだから  
導師さん  
その次はまだしばらくはいいよ  
このままにしておいて  
このままに